

(6) 御柱祭にみる歴史的風致

ア はじめに

松本市の東部にある山辺地区の大和合神社、宮原神社、橋倉諏訪社、須々岐水神社、千鹿頭社、神田地区の千鹿頭神社と、松本市の西部の島立地区の沙田神社では御柱祭が行われています。それぞれの御柱祭は、松本市重要無形民俗文化財に指定されています。

御柱祭は、信濃国一宮の諏訪大社（長野県諏訪市）で寅年と申年の年に行われ、本殿等の四隅に巨大な柱を建て替える行事です。

松本市内では、諏訪大社の1年遅れの卯年と酉年の年に御柱祭を行っています。

沙田神社を除く山辺地区の6社は諏訪の神を祭神としています。これは、中世に諏訪氏の一族である神（山家）氏が山辺地区を支配していたことから、諏訪の信仰がこの地域に根付いているものです。

御柱祭は、御柱にする木を選ぶ「見立て」から始まり、御柱を建てる「建御柱」まで、多くの人々が参加し、様々な儀礼を経ながら行われます。



御柱祭を行う神社の分布と御柱の曳行ルート

イ 歴史的風致を形成する建造物

(ア) 千鹿頭社本殿・千鹿頭神社本殿

この神社は江戸時代の初めまでは一つの神社でしたが、元和4年（1618）に、松本藩領のうち東五千石を諏訪藩に分知したときに、神社のある千鹿頭山の尾根が松本藩と諏訪藩の境界となったことから、神社も二つに分かれました。

両社の本殿は並立し、向かって右側が神田地区の千鹿頭神社、左側が山辺地区の千鹿頭社です。両本殿とも、木造、一間社流造、銅板葺（もと茅葺）の建物です。造営時の棟札から、千鹿頭神社は正徳4年（1714）に、林地区の千鹿頭社は元文5年（1740）にそれぞれ建築されたものであり、ともに松本市重要文化財に指定されています。



千鹿頭社（左）・千鹿頭神社（右）

千鹿頭社本殿は、棟札や文書から、松本藩主戸田光雄から銀七枚の寄進を受けて、元文5年（1740）正月に手斧始め、7月に遷宮されたこと、大工棟梁が松本町下横田町の中根弥七（郎）であることが分かります。弥七の名前は市重要文化財の牛伏寺仁王門の建立棟札（享保11年（1726））にも見えており、墓股の輪郭が仁王門の

ものと酷似している点でもこのことを裏付けています。

千鹿頭神社本殿には、建立時の棟札が残っており、高島藩主諏訪忠虎が木材を寄進し、正徳4年（1714）に造営が始まり、翌5年（1715）6月に竣工したこと、大工棟梁が下諏訪柴宮村（現岡谷市長地東堀）の渡辺元右衛門であること等が記されています。大工棟梁の渡辺元右衛門は東筑摩郡朝日村の五社神社本殿、岡谷市小尾口の津島社などを造営しています。

二つの本殿を比較すると、千鹿頭神社本殿は随所に17世紀末から18世紀前期の諏訪工匠による建築様式がよく示されているのに対し、千鹿頭社本殿は18世紀中期の松本工匠の様式を示しています。さらに、高島藩領と松本藩領の境に併置して社殿が設けられるという極めて特異な形態は、近世の松本地方の歴史的環境を知る上でも重要な遺構です。

(イ) 須々岐水神社（再掲）

前掲（96 ページ）のとおりです。

(ロ) 宮原神社（再掲）

前掲（96 ページ）のとおりです。

(ハ) 大和合神社（再掲）

前掲（96 ページ）のとおりです。

(ニ) 橋倉諏訪社

境内には本殿、拝殿、神楽殿の他、宝暦7年（1757）の銘文のある石灯籠などがあります。神社の創建年代は不明ですが、本殿背面には神社裏にあった山城の林城を領した小笠原氏の家紋の三階菱が刻まれています。現在の本殿は宝暦2年（1751）に再建された一間社流造の建造物です。



橋倉諏訪社

(ホ) 沙田神社

沙田神社は島立地区にあり、平安時代の延喜式に記載されている古い歴史のある神社です。信濃三の宮とされ、沙田神社は三の宮とも呼ばれています。境内には本殿、拝殿、神楽殿の他、御子安神社がおかれ、文政6年（1823）の銘文のある石灯籠があります。祭神は諏訪神ではありませんが、御柱行事が行われています。神明造の本殿は文化5年（1808）の建築とされています。



沙田神社

ウ 活動

(ア) 松本市内の御柱祭の概要

松本市内の御柱祭は、いずれも卯年と酉年に行われ、神社によって日が異なります。

御柱祭は、御柱にする木を選ぶ「見立て」から始まり、御柱となる木を伐採して山から引き出す「山出し」、山出した御柱を里近くまで曳き出す「中出し」、御柱を神社まで曳いていく「里曳き」、神社まで曳いて行った御柱を建てる「建御柱」の順に行われます。また、御柱を引く綱を作る「綱より」や、采配など祭礼の時に用いる道具の準備、木を御柱とするために形を整えたり、引き綱をつける穴をあけたりする「木づくり」が並行して行われます。建御柱の2年前から一連の儀礼を行っている神社もあります。

(イ) 千鹿頭社・千鹿頭神社の御柱祭

両社の御柱祭は同じ日に行われ、卯年と酉年の年の例大祭の5月3日に行われています。御柱見立てから建御柱まで、3年がかりで儀礼を重ねて行われています。

御柱は、両社がもともと1つの神社であったことから、両社の本殿と拝殿を囲むように4本の御柱が建てられ、両社の氏子が2本ずつ建てることになっています。本殿に向かって右前（南側 神田地区側）の御柱が一の柱で、そこから右回りに二、三、四の柱となっています。千鹿頭神社の氏子である神田地区が一、四の柱、千鹿頭社の氏子である山辺地区が二、三の柱を建てています。

『信府統記』には、松本藩領であった林村の千鹿頭大明神について、御柱の神事が古くから行われ、7年に一度ずつ卯年と酉年の4月の卯酉の日に御柱を建てること、歴代藩主から御柱祭に当たって寄進が行われていることが記載されています。

【千鹿頭社】

千鹿頭社の御柱祭は、山辺地区の林集落、大嵩崎集落の氏子が主体で、きんかれん金華連と呼ばれる青年が積極的に参加して祭りを盛り上げるほか、女性や子供を含め全戸が参加します。

神社が千鹿頭山の上にあるため、境内の坂での里曳きの際は、林集落の近隣の南小松、北小松、西小松の各集落からの応援を得ています。

祭りの儀礼は、祭礼の2年前に、まず最初に山での見立て、手締めと結納贈り、采配とぼんてんづくり、綱よりが行われます。続いて、御柱の根掘りと伐り倒し、木づくりがなされて山出しとなります。伐り出された御柱は、薄川にかかる金華橋の聖観音碑付近の辻に安置されます。

年が明けて中出しを行い、林の集落内を練って中央の石橋付近に安置されます。御柱祭の年の5月3日に、里曳きをして千鹿頭山の境内に曳きこみ、建御柱となります。

【千鹿頭神社】

祭り集団は、各戸から出る当主か若い衆、又は代わりの女性が参加し、氏子総代、



千鹿頭神社の御柱（里曳き）

町会役員、一般住民で組織された御柱実行委員会の企画のもとに運営されています。

祭りの儀礼は、仮見立てと木元への手締めと結納をして、総見立てと斧入れを行い、綱よりと藤綱つくりの後、伐り倒しをし、木づくりが行われてヤマにおかれます。2年前の春先の祭りの準備で、御柱は道路に運び出され、山から里へ順番に「山出し」「中出し」「里曳き」と御柱を曳き出します。里曳きの後は建御柱までの間、地区の決められた場所に安置されます。

翌年改めて綱よりと藤綱づくり、采配づくりが行われ、祭りの年の春先には建て穴のマスに合うように木づくりが行なわれ、里曳きを行い、建御柱となります。里曳きの際には長持ちも参加します。



千鹿頭神社の御柱
(山出しの木遣り)

(ウ) 須々岐水神社の御柱祭

須々岐水神社の御柱祭は、享保年間(1716～35)の同社の日記に記録されている、歴史ある祭りです。明治28年(1895)の書上げには、「七年に一度、旧暦干支卯西とりの年の十月初卯西の日、或は中卯西の日」に行つたとあります。また、柱材は前年中に伐採し、翌年春に中出しを八ヶ郷の氏子に加え里山辺村、入山辺村に加え岡田の一部の人夫で曳き出したとあります。これは江戸時代以来の倣いです。



須々岐水神社の御柱祭 (里曳き)

御柱祭は卯と酉の年の須々岐水神社の例大祭の日である5月5日に行なわれています。現在は当年の2月下旬から根掘り、伐採、山出し、木づくりを行ない、5月5日の里曳き、建御柱まで、週末は御柱祭一色に染まります。4本の御柱のうち、本殿の前側にある一の柱、二の柱を新たに建て、それまで一の柱、二の柱であったものを本殿の後ろ側の三の柱、四の柱として建て直します。

もともとは8町会からなる祭り集団でハッカの祭りとも呼び習わされていましたが、現在は8町会のうちの荒町から西荒町が分かれたため、9町会で行われています。9町会は二つに分かれて一の柱、二の柱を担当します。一の御柱は薄町、二の御柱は上金井の親郷が中心となり仕切り、御柱祭全体の仕切りは須々岐水神社がある薄町が行なうという習慣があります。



須々岐水神社の御柱祭
(建御柱)

一の御柱は入山辺の南方地区、二の御柱は湯の原地区の山林から伐り出します。伐り出された御柱は薄川地域に共通した木づくりがおこなわれ、里曳きに備えるため所定の場所まで曳き出されます。準備された御柱は祭りの日の早朝から里曳きが行なわれ、神事を受けた後に一の御柱から順に建てられます。

須々岐水神社で建御柱が終わると、日を改めて薄川上流の奥社にも御柱が建てられます。

(I) 宮原神社、橋倉諏訪社、大和合神社の御柱祭

須々岐水神社の他に、山辺地区では宮原神社、橋倉諏訪社、大和合神社で御柱が行われています。これらの神社の御柱祭の起源は明らかではありませんが、明治8年（1875）に入山辺村が筑摩県に提出した村取調書には、これらの神社について「七ヶ年毎に一度御柱神事執行」とあります。

山辺地区の神社の御柱祭の特徴は、山出しと里曳き・建御柱を2年がかりで行う神社があるところです。また、須々岐水神社、橋倉諏訪社は2本、大和合神社は3本の御柱を建て替えるにとどめており、旧村単位など小さな集団で行う工夫がなされています。いずれも勇壮な木遣歌きやりうたの先導により曳航され、年齢ごとに役割分担された集団により手際よく柱を建てていきます。また、日を改めて、奥宮や境内末社にも小さな御柱を建てるところもあります。

橋倉集落で行われている橋倉諏訪社の御柱祭は、最も小さな事例です。

御柱祭は、全戸総出で1年限りで行われ、城華連と呼ばれる青年総代が中心となり祭りを仕切ります。祭りの前年11月ごろに実行委員会が組織され、翌年3月にそれまでの御柱を「御柱休め」と称して倒し、一の柱と二の柱の柱の下部を切り落として、次の建御柱の三の柱、四の柱とします。御柱の伐り出しは、青年を中心に根掘りを行い、翌週には全戸で伐り出して山出しを行います。山出しのときは御柱の下に3本の丸太を置き、コロ（重量物を人力で移動するとき、その下に敷く丸太のこと）として集落の上まで曳き出し、皮を剥ぐなど木づくりが行われます。木づくりが終わった御柱は里曳きされ、一の柱から順に建てられます。建御柱は例大祭の4月29日に行われます。

宮原神社の御柱祭は、祭りに係わる8集落の当主や若い衆で実行委員会が組織され、御柱総代会長のもと、曳航や木遣り師などの各分担が選出されます。建御柱の



橋倉神社の御柱祭（里曳き）



橋倉神社の御柱祭（建御柱）

前年に山出しを行ない、建御柱の年に里曳きと建て方が行われます。

御柱は薄川の右岸、左岸の両方から2本ずつ伐りだされ、伐り出した場所の地名から、右岸のものを千手御柱、左岸のものを宮原御柱と呼びます。4本の御柱のうち、一番太いものを一の御柱とし、一の御柱とともに切り出されたものが四の御柱、残りが二の御柱、三の御柱とされます。

大和合神社の御柱祭は9集落で行われており、一の御柱は牛立、大和合、大仏、二の御柱は厩所、原、一の海、三の御柱は上手町、奈良尾、三反田の各集落が分担しています。前回の御柱祭の一の御柱の根元を切って短くしたものを四の御柱とします。

当主や若い衆で実行委員会が組織され、御柱総代会長のもと、曳航や木遣り師などの各分担が年齢に応じて選出されます。建御柱の前年に見立て、山出しが行われ、里曳きまで安置されます。建御柱の年には、宮普請、綱よりを行い、例大祭の4月29日に里曳きと建御柱が行われます。

建御柱では、お宮の笹鳥居の前で神事が行なわれて神木となり、境内に曳きこまれて御柱を建てていきますが、神木となった後の御柱には人が乗らないという特徴があります。

大和合神社の御柱祭をはじめ、薄川の左岸で行なわれている御柱祭には、御柱の根元を太く作るオトコヅクリや、御柱の皮を剥ぎ四角に面を削ること、神事の各所作や木遣りの節回しなど共通点があり、地域類型としてみることができます。



宮原神社の御柱祭（建御柱）



大和合神社の御柱祭
（建御柱）

(オ) 沙田神社の御柱祭

山辺地区以外では、島立地区の沙田神社で御柱祭が行われています。この神社の祭神は諏訪の神ではありませんが、菅江真澄の『伊那の中路』（天明3年・1783）にも挿絵入りで紹介され、古くから御柱祭が行われていることが知られています。当時は10月21日に建御柱を行い、建てた御柱は3本でしたが、現在は4本建てられています。

松本では最も盛大に行われる御柱祭で、信



沙田神社の御柱祭（山出し）

濃一の宮の諏訪神社（諏訪市）、信濃二の宮と呼ばれる塩尻市小野神社と比較して、信濃三の宮と呼ばれる沙田神社は「支度見るなら沙田神社（三の宮）」といわれるように、きらびやかな衣装が特徴です。島立地区には御柱を伐り出す山がないために、御柱の柱材は江戸時代からの例に倣い、現在も波田地区の山から伐り出されています。伐採場所から神社までの距離は10kmを超えるため、現在は曳航に地車と呼ばれる台車を用いています。4月に伐採、山出しを行い、里曳き、建御柱は9月下旬に行われます。山辺地区の御柱祭とは作法が異なり、信濃国二の宮である小野神社の御柱祭との共通点が多く見られます。

現在の御柱祭は、卯と酉年の沙田神社例大祭である9月26日を目安に行われています。

島立地区の三の宮・中村・永田・町区・大庭・小柴・荒井・堀米の8町会により運営され、御柱ごとに御柱総代を決めています。一の御柱は三の宮・中村、二の御柱は永田と町区、三の御柱は小柴と大庭、四の御柱は堀米と荒井が担当します。

御柱の儀礼は、御柱を伐り出す波田地区の仲人が世話した御柱の仮見立てを行い、御柱が決まると手締めと結納が行われます。その後、本見立てを行って注連掛しめかけが行われ、青年という役割の衆により采配、梃子棒が作られます。

3月下旬になると、島立地区の周辺の四方締めを行い、御柱ごと又は町会ごとの縄ない、ヤマでの伐り倒し、木づくりをして、ようやく御柱が整います。

4月に波田地区から山出しされて、島立地区の決められた場所に秋の里曳きまで安置されます。9月26日の例大祭に御柱ごとに里曳きされて、神社の神域に一の御柱から曳きこまれ、順に建御柱となり、胴づきをして儀礼を終えます。



『伊那の中路』の沙田神社御柱祭の図



華やかな衣装の沙田神社の御柱祭
(里曳き)

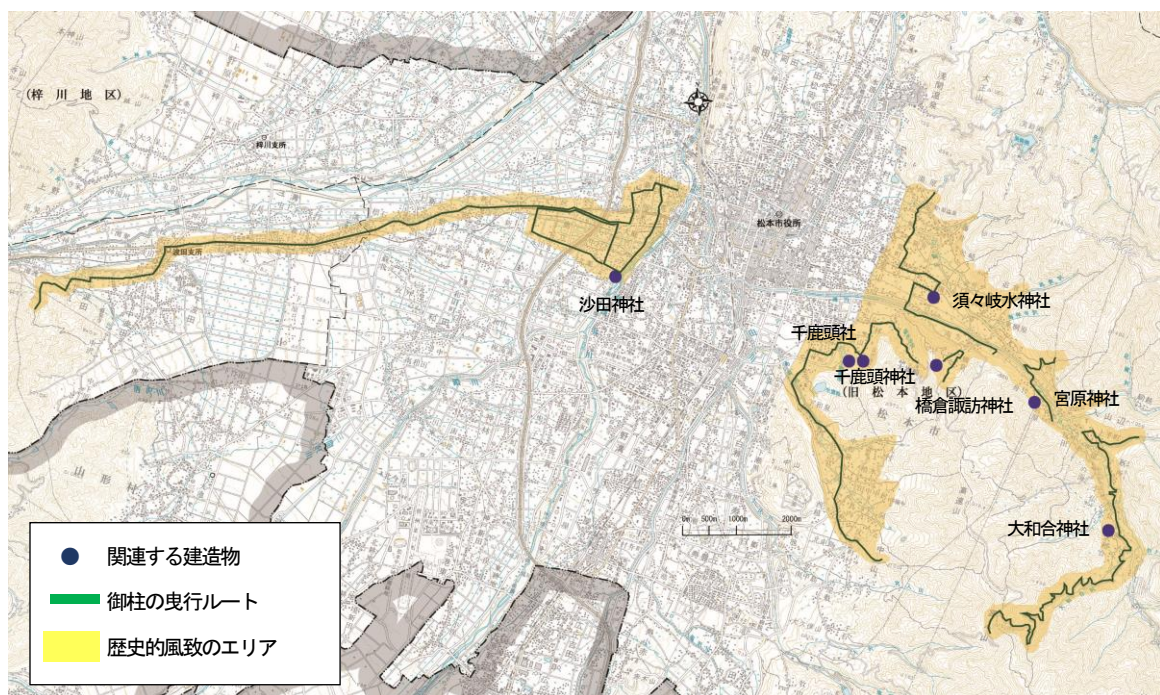


沙田神社境内に曳き込まれる御柱

エ まとめ

卯年と酉年に行われる御柱祭は、山から伐り出された柱を人の力で曳き、神社の境内に建てるお祭りです。お祭りの数年前から木を見立て、伐採し、古くからの集落の間を多くの人の手により柱を曳いていく様子は、周囲の景観とともに歴史的風致を形成しています。

また、多くの神社の祭りは江戸時代に始まった村単位の鎮守の祭りです。氏子たちが結束し、それぞれの鎮守を中心に行っている様々の祭りは、歴史ある社殿とともに、なつかしい風情を醸し出しています。



歴史的風致のエリア